

# 第29回 全国読書作文コンクール 優秀作品集

小学生5点・中学生4点

公益社団法人全国学習塾協会



# 令和元年度第二十九回全国読書作文コンクール

## 小学生の部・大賞

困った時は「お助け係」へ！

平塚 陽丸 (小五)

自信過剰なラビと消極的なジョー、この二人が協力していじめっ子に立ち向かった。それも「知恵」を絞って。どうか成功しますようにと、僕も祈りながら結果を見守った。

ジョーは消極的な性格だけれど、彼の観察力はすごいと思う。いじめっ子の行動パターンをよく知っているから、次の動きが予想できたのだろう。計画は大成功！僕も思わずガッツポーズをした。知恵を絞れば強い者を倒せるということが証明された瞬間だった。自分は「優秀な人間」と思い込んでいるラビも、誰かと協力して輝く勝利に気付いたと思う。

確かに、一人では出来ないことも誰かの応援があることで可能になる。去年、僕はクラスで係を決める時、「お助け係」に立候補した。どちらかと言えば、ジョータイプの僕はおとなしく、目立たない存在だ。そんな自分を少しだけ変えたいと思い、「お助け係」に手を挙げた。この名前の響きがいかに正義の味方という感じでカッコいいというのもあった。でも何より、困っている人の力になりたいという気持ちが強かった。そ

の係についたのは僕一人だけだった。果たして本当に僕で大丈夫なのだろうか。ちゃんと務まるのだろうか。決まったとたんに、そんな心配におそわれた。実際始まってみると、僕に助けを求める人は誰一人いなかった。全く僕の出番はない。気が抜けるほどひまだ。ひまだから楽だという考え方もできるが、僕はむしろ不安になった。僕はみんなにどう思われているのだろうか。頼りない「へなちょこ」と思われているのではないか。だから、助けを求める気にもならないのではないか。勝手にそんなことばかり考えて、僕はどんどんへこんでいった。そんな時、パッといい考えがひらめいた。僕はジョーのように知恵を絞った。ポスターを作って宣伝してみよう。「困った時はお助け係へ！ぼくが力になります！」と。おとなしい僕にしては大胆な表現だった。少し恥ずかしかったけれど、効果はあった。依頼者が急増した。この問題の解き方を教えてというのが一番多い。教えている内に僕も楽しくなっていく。相手がちゃんと理解できるように、説明の仕方も工夫する。いつ質問されてもいよいよに、僕は勉強に意欲的になっていった。「分かった」と言って喜んでもらえること、「ありがとう」と感謝されることが確実に自分の力になっていくと気付かされる。

「助け合う」ことで、可能性が広がる。僕の「お助け係」は今年も続行だ。今のところ僕の手には負えないような深刻な依頼はない。これから先、もしラビやジョーのようにいじめ問題にぶつかったら、僕はどう助けたらいいのだろう。いじめ自体ない方がいいけれど「お助け係」とし

ていい解決ができるよう、普段から考えておこうと思う。深刻な依頼がきたら、その時は知恵を絞って「お見事！」と言われるようなお助けをしたいから。

対象図書名 明日のランチはきみと

### 大賞へ、審査員のひとこと

自分のことをきちんと見ていて、自分の弱さもとてもよく分かっています。そういうことから自分を変えなければいけないという思いも伝わってきます。当然、クラスのみんなを見つめる目というのも、読んでいて感じます。

「お助け」するには、何でも勉強しなければいけない、何でも知識を得ておかなければいけない、筆者にはそういった勢いを感じます。実際、筆者だったらやってくれるかもしれないという期待もあります。健康的であり、同時に、少しいじけたところが私は好きです。筆者はそういったものをずっと持ち続けて、人生で持ち続けるのではないかと思えます。そこがプラスになっていくと思えます。また、物書きの要素があるのではないかと感じます。このまま上手に育って欲しいです。謙虚で良い人であるが、さらにサービスピース精神の強さ、そして少しいじけたところがこの子を伸ばす力になると思えます。

### 小学生低学年の部・最優秀賞(小一)

ちよつとすきになつたおはなし

白石 梨紗

わたしは、じぶんでほんをよむのがにがてです。でも、ほんをよんでもらうのは、だいすきです。じぶんでよむと、しらないじがでてきたりして、すらすらよむことができないからです。

おかあさんが、すらすらよんでくれると、あつというまにひとつのほんをよみおわってしまいます。わたしも、どんどんつづきをききたいので、わくわくしながらきいています。おとうさんは、とつても、ていねいにゆつくりゆつくりよんでくれます。

わたしは、おとうさんのよみかたがすきです。つぎのひになつてもおはなしのなかみをおもいだせるからです。でも、おもいだせなくても、そのときたのしいのでおかあさんにもよんでほしいです。

ごほんのなかにでてくるちーたーのちつたちやんは、びゅーんとほんをよんでしまいます。かばのひつぽくんは、のそのそあるくみたいに、ひとつずつゆつくりゆつくりよみます。はやくよむのも、ゆつくりよむのも、どっちもすごいです。でも、ごほんのなかではちつたちやんとひつぽくんは、とつてもなかよしだけど、よみかたはまねっこできません。

わたしは、なんでかなあとおもいました。とつてもはやいちったちやんと、とてもゆつくりなひつぽくんは、どっちもただしいとおもいます。はやくよむのと、ゆつくりよむのは、どっちもたいせつだけど、りょうほうするのは、とつてもむずかしいです。わたしは、ひつぽくんのよみかたになりたいです。

このまえ、くらすのおともだちとけんかをしました。わたしは、わるくないとおもいました。おともだちも、わるくないといいました。せんせいがおはなしをいっしょにきいてくれて、もういちどおはなしをしたら、どっちもわるくないけど、なかなかおりができました。ふしぎだけど、げんきになりました。

ひつぽくんのいいところは、ほんのなかみをしっかりとおぼえられるから、とちゅうであきないでよめます。そして、ほんのおもしろいところをおしえてあげられます。

ちったちゃんのいいところは、いっばいほんがよめて、ほんをさがしているおともだちにも、かしてあげられるところです。

このごほんは、おかあさんが「おもしろいかもよ。」

と、かっけてきてくれたのでよんでみました。かたかながあつて、ときどきわからなくなったときは、おとうさんがたすけてくれて、ひつぽくんみたいにゆつくりゆつくりよみました。だからいつかは、ちったちゃんみたいにちょうとつきゅうですらすらよめるようになりたいです。

ちよつと、ほんをよむのがすきになったおはなしでした。

対象図書名 ふたりはとつても本がすき！

### 小学生の部・最優秀賞(小四)

#### 心が通い合つて

松本 倫奈

マーティがシャイローと一緒にいたいと思う気持ち、私にはとてもよく分かる。私の家にも五年前まで、メルと名付けた犬がいたから。メルは家族の一員だった。かけがえのない私達の家族だった。私が四歳になつて、ようやくメルを抱っこできるようになったのに、メルは病気で亡くなつた。もつと一緒に遊びたかつたのに、もつと私の成長を見てほしかつたのに、天国へ行つてしまった。その時の悲しみは四歳の私にも大きなものだった。まして、父や母、姉などは、口もきけないほど沈んでいた。もう二度と、こんな悲しい思いはしたくないと言って、犬を飼うことには反対する。私はメルのようなかわいい犬をまた飼いたい。以前は、私の方がメルにお世話になつてばかりだったので、今度は私がお世話をしたいと思つている。今の私ならそれが出来るという自信がある。

私の手で育てたいという気持ちが強い。

犬は飼い主を選べない。ジャドのような乱暴者に飼われたシャイローは、本当にかわいそうだ。シャイローを蹴ったり、なぐったり、ひどいことをするので、「やめてえー!!。」と叫びたい気持ちになった。読んでいる内に、私はどんどんジャドに対する憎しみが強くなっていった。

「きみは、ぼくが守る!。」マーティのこの決意はとても強いものだった。お願い、マーティ、絶対にシャイローを助けて。シャイローを救えるのはマーティしかないんだから。私はシャイローとマーティが一緒に暮らせませうにと、ひたすら祈った。

マーティが、「しーっ。」と言ったら、シャイローはすぐに鳴き止む。私はこの場面が大好きだ。マーティの優しさが感じられ、シャイローの信頼の強さが感じられる、とてもいい場面だ。お互いに心が通じ合っているのがとてもよく分かる。シャイローはちゃんと分かっている。マーティがいかに自分を思ってくれているかということ。マーティこそ、本物の飼い主になれる人だと、はつきり言える。

マーティとシャイローが楽しそうに遊んでる様子が何度も目に浮かんだ。その度に、うらやましくなって、私もメルのことを思い出す。今までも、何度もメルのことを考えたことがある。メルの思い出話を家族にすると、みんな、「悲しくなるから・・・。」と言って、それ以上話そうとしない。いつもそうなる。だから、また犬を飼いたいなどは絶対に言えない。言つてはいけないことなのだ。

いくつもの場面から、シャイローのかわいらしさが伝わってきて、私はメルの姿と何度も重なった。犬は飼い主を選べない。でも犬はみんな幸せになる権利があると私は思う。

ジャドが、「もうおまえの犬だ。」とマーティに言った時、私は心からほっとした。

対象図書名 シャイローがきた夏

## 小学生の部・最優秀賞(小五)

### まず自分から

中田 さや

「プラスチックごみを捨てるな。」これはよく言う言葉だ。なぜよく使われるのか、この本を開いてすぐに納得した。その理由は、この本の初めの写真だ。人間がわざとしたのか。私は一瞬目を疑った。なぜならそこには、かみちぎれそうもない多量の太いホースのような網が体に巻きつき、全く動くことが出来ないアカウミガメの写真があったからだ。さらに衝撃的な写真が続く。二ページ目には、体にビニール袋が服のように巻きつき、全身を襲っているシュバシコウの写真があった。それらの

写真だけで、プラスチックごみを捨てる怖さが伝わってきた。

そもそもなぜ、プラスチックごみを捨ててはいけないのか。この本には、理由が詳しく書いてあった。簡単に言うと、二つ。

一つ目は、自然に返らず残り続けること。二つ目は、間違えて生き物が飲み込むこと。こんなにも危険なものが、家中、町中、世界中にあふれているのだ。そこで、私はいつもお母さんに言われていることを思い出した。私の家族には、まだ八ヶ月の双子の赤ちゃんがいる。最近、ハイをして、落ちているものを片っぱしから口に入れる。口に入れると、お母さんがいつも、

「ちゃんと片付けして。ごみはごみ箱に捨てて。」

と、怒ってくる。考えてみると、ティッシュのような紙より、プラスチックのものは特に注意するよう言われる。プラスチックの怖さを知って、私はこのことに納得した。そして、私は、はじめの写真に、人間の赤ちゃんを重ね合わせてゾツとした。はじめの写真のあの生き物たちと、人間の赤ちゃんはどこが違うだろう。どちらも自分からプラスチックに近づき、どちらも自分では取り除けない。悪いものとは知らないからだ。人間は、プラスチックの怖さを知っていて、自分達からは遠ざけることが出来る。でも、他の生き物たちに対しては、だれがどう伝えるのか。プラスチックを作り、その怖さを知る、人間が、自分達で命や環境を守らないといけないと、私は思う。

私に出来ることは何なのか。はじめに「プラスチックごみを捨てるな。」

と書いたが、それは、だれかに対して伝える言葉。しかし、そうではなくて、まず私が出来たことを考えてみた。プラスチック製のいらぬものを、出来るだけ買わない。必要なものだけで生活する。プラスチックは、決められたルールに従って捨てる。さらに、インターネットで身近に出来ることを調べてみた。食品の保存はふた付きを使い、ラップの使用を減らすことや、マイボトルを持ち歩くことなども、身近に出来る一歩だと知った。まず私から。双子の赤ちゃんのためにも、そして多くの生き物のためにも、自分から始めていきたいと思う。

対象図書名　クジラのおなかからプラスチック

### 小学生の部・最優秀賞(小六)

#### 自分の気持ちを大切に

木戸 紗 佑 里

普通の食堂とどう違うのだろう。そんな単純な疑問から始まり、私も子ども食堂「かみふうせん」に入ってみた。そこには、家で一人で寂しく食事をしている子や、貧しくておなかいっぱいご飯を食べられない子

供達が来ていた。その一人が、麻耶だった。

私は麻耶の置かれている境遇を知って、がく然とした。まだ六年生なのに、両親に置き去りにされ、たった一人で暮らしていたのだから。電気もガスも水道も止められた家で、一人でどうやって生きていけるのだろうか。同じ年の私には無理だ。空腹と孤独の毎日。そこには絶望しかない。辛すぎて、私なら学校に行く気にもならない。案の定、何週間もお風呂にも入っていない麻耶は、臭い、汚いと男子に突き飛ばされたり、いじめられたりしていた。何をされても我慢していた麻耶を見て、私は胸が押しつぶされそうになった。

私なら絶対黙っていない。自分の思ったことをはっきり言う。男子にからかわれても、言い返す。ひどいことを言われても、メソメソ泣いたり、じっと我慢したりはしない。古典文学が好きな私は、休み時間も読書することが多いのだが、ある日、「枕草子」を読んでいたら、うるさい男子が私の本を取り上げて、「何これ？まくらくさこ？うわあ、だっせえ！」と、大声で騒ぎ立てたのだ。自分の好きな本をバカにされて、私は心底腹が立った。清少納言が侮辱された気分だった。黙っていられなかった。「まくらのそうしって読むんだよ！まくらくさこって読んでいるお前の方が、よっぽどダサイんだよ！」と言い返した。すると、「皆さあん、ここにオタクがいます。古くさい本を読んでいる超オタクがいます！」「——（この野郎！）」と大声で叫びたい衝動に駆られた。喉まですで出かかったのを私はぐつとこらえた。「バカにするなら読んでからにす

れば！」そう言って私は自分の本を取り返し、無視した。私のこの一言が彼を完全に黙らせたのだった。

私はおとなしくいじめられているタイプではない。と言っても、暴力でやり返すのではなく、相手をやり込めるひと言を言うのだ。考えてみると、私がそんな強気な行動ができるのも、自分が恵まれているからかもしれない。守ってくれる家族がいて、衣食住が満たされている自分。もし私が麻耶のように食べ物もない極限状況に置かれたら、闘うどころか、ただただ卑屈になっていたに違いない。

世の中には、複雑な家庭の事情を抱えた子が大勢いるのだろう。麻耶の様に孤独と空腹の日々を過ごし、薄汚れた格好でいじめられようと、傷つかないふりをしている子も・・・。「自分の気持ちも大事にしなきゃ」。麻耶がそう気付けたのもあーさんのおかげ。この子ども食堂に来た人は皆、おなかだけでなく心も満たされる。ここは魔法の場所。いつのまにか私まで、あーさんの魔法にかかっていた。

対象図書名 子ども食堂 かみふうせん



## 中学生の部・大賞

### 今、子ども食堂があるということ

福田 虹胡（中一）

「どんな理由があろうとも、たった一人で食事をする寂しさに変わりはありません。」

私の家の近くにも、子ども食堂がある。先日、初めてそこへ準備のお手伝いに行った。地域の方々や高校生のボランティアの人達と役割を分担し、手際良く作っていく。この日のメニューは、具山盛そうめんとおにぎり、野菜の炒め物や酢の物、デザートにフルーツ、かき氷と盛り沢山。その日、寄付していただいて集まった食材やアイデアで、どんどこメニューが増えるらしい。みんなとても楽しそうに、年配の方から切り方やコツを教わったりしている。一緒に行った小学校一年生の弟は、初めての包丁や缶切りと格闘している。その姿を見て、また皆が笑顔になる。とつてもにぎやかなキッチンだ。

料理をしている傍らでは、既に集まっている子ども達が、宿題をしたりお絵描きやゲーム等、思い思いに好きな事をしながらごはんの時間を待っている。まるで、家のリビングにでもいるようだ。

私が今まで思い描いていた子ども食堂は、何人かの大人が支度した食

事を、集まった数人の子ども達に提供する、静かで、どちらかというと地味で暗いイメージのものだった。ところが、私の目の前にある子ども食堂では、真逆の光景が広がっている。

大きな違和感を覚えた私は、実行委員の方に、どうしてこの子ども食堂を運営しているのかを聞いてみた。すると、とても意外な答えが返ってきた。子ども食堂は、「大人も子どもも関係無く、みんなでごはんを食べること」が目的だそうだ。確かに、元は子どもの孤食が背景にあった。けれど、大人だって一人で食事するのが寂しいのは同じ。大勢でご飯を食べる事で笑顔になれるなら、そこに年齢の制限は設ける必要が無い。そして現在は、いろんな世代の人達が集まって、一つの家族のように食事ができる「居場所」づくりをしているのである。

この本でも、様々な事情を抱えた子ども達が集まってくる。けれど皆同じなのは、それぞれが自分の「居場所」を求めてやってくるということだ。「いただきます」の時間が近付くと、続々と人が集まって来た。スツップさん含め五十五人での「いただきます」は大迫力。それだけで笑顔があふれる。

みんなでご飯食べるそうめんは、とつてもおいしかった。準備の時から参加されていた年配の男性が

「いつも、家での食事は寂しいけれど、こうやって大勢でご飯を食べると、それだけで楽しくて。子どもや孫や、家族が増えたみたいで、幸せな気持ちになれるんです。庭で採れるきゅうりも、食べきれなくて困る

んだけど、ここへ持って来ればとつてもおいしい料理になって、こんな  
にたくさんの人が喜んで食べてくれる。ここへ来るのが楽しみで仕方無  
いんだよ。」  
と、嬉しそうに話してくれた。

私には、家から歩いて十分くらいの所に住む祖父母がいる。幼い頃か  
らとても可愛がってもらって、よく泊まりに行ったりもしていたが、私  
が中学生になってからはあまり会わなくなった。どちらも、特に趣味が  
ある訳でもないが、二人で仲良く暮らしている。けれどこの先、どちら  
かが入院したり、施設へ入ったりする事になれば、一人での生活になる  
だろう。

一人で起きて、買い物に行って、食事をつくって、食べて、寝る。そ  
れ以上でも、それ以下でもない毎日。朝起きてから寝るまで、誰とも会  
話の無い一日。それが毎日。楽しい事は、笑う事はあるのだろうか。寂  
しいのか、それとも当たり前になってしまふのか。

昔は二世帯、三世帯が多かったと聞くと、漠然と「面倒だな」「核家族  
の方が気楽でいいな」と思っていた。しかし、核家族の先には必ず、一  
人暮らしのお年寄りがいるという問題を、子ども食堂の活動から考えさ  
せられた。私の祖父母も、両親も、そしていつかは私も、老いて一人に  
なるかもしれない。

私は、いつも家族と一緒に食事をしている。そんな、あたり前だと思  
っていた事は、実はとても幸せな事なのだ、子ども食堂が教えてくれ

た。

一人で食事をする事は、年齢や理由は関係無く、とても寂しい事で、  
子ども食堂はその気持ちを少しでもやわらげてくれる場所だと感じた。  
今はまだ、月に一日だけのオープンで、利用する人も限られているが、  
一人でも多くの人に、実際に足を運んで、あの「いただきます」を体験  
して欲しい。そして、今、子ども食堂がある意味や目的を知ってもらい  
たい。子ども食堂は、ただ単に食事ができる場所ではなく、様々な世代  
の人達が分け隔て無く団らんし、家族みたいに笑顔でおしゃべりができ  
る、実はとってもすごい食堂なのだ。

対象図書名 子ども食堂 かみふうせん

#### 大賞へ、審査員のひとこと

これを読んだときに、選考委員をやってよかったと感じました。良い  
作品に出会えたという温かい気持ちになれました。それは、文章の確か  
さもあるし、いまを意識しているし、「子ども食堂」というものをよく掴  
んでいるからで、実際に子ども食堂に今後関わっていく気がします。

筆者は実際に本で読んだ子ども食堂を実際にも見に行つて、子ども食  
堂がある現実というものをよく見ていて、自分なりの役割を少しずつで  
も果たしていける、そういう、頼もしい人になっていけるのではないかと  
思います。

少し広い視野で見たとき、地域の人達とどう絡んでいくか、大人と子  
供がどう交流しあっているかということも含めて、これからの問題が全

てこのなかに含まれていて、筆者にはぜひ頑張つて欲しいと思いました。

## 中学生の部・最優秀賞(中一)

### 唯一無二の存在だから

大沼 まこ

「命というのは、生まれるべくして生まれてくるもの」——航のお父さんのこの言葉が心にしみる。この世に生まれ出た私達はみな、唯一無二の存在と言えるのかもしれない。今回、「命のコピー」という、とても難しい問題を通して、私は改めて「命の重さ」、「生きる」ということを真剣に問い直してみた。

一人っ子の私は、幼い頃から姉のいる子を羨ましく思っていた。お姉さんが妹を優しく世話している光景を目にする度に、羨ましくてたまらなかつた。妹の方もお姉さんに思いつきり甘え、手をつないで帰っていくその後ろ姿をどれだけ眺めていたことだろう。「私もお姉ちゃんが欲しい」と何度もせがむ私に母は思いもかけないことを言った。私の姉になるはずだった存在のこと。。残念ながらこの世に生を受けることが出来なかつた姉。誕生することなく消えていった命があつたことを。。

当時、幼稚園児だった私が、果たしてどれだけ理解できただろう。その時の自分の心理状態をよく覚えていないが、その時の母の辛そうな表情だけは、今もはっきり記憶している。

それ以来私は、「お姉ちゃん欲しい」という無い物ねだりをやめた。母に打ち明けられてから、私の中で明らかに何かが変わつた。いつも姉の存在を意識するようになったのだ。私はひとりっ子じゃない。私には姉がいる！いつも私のそばに姉がいて、私を見守ってくれている。剣道の試合やピアノコンクールなど、大事な場面で「頑張れ」と応援してくれる姉を感じる。そのおかげで、へこたれずに頑張れる自分がいるのだと。

航にとって希がいかにかげがえのない存在であるか、それは痛いほど伝わってくる。希がかげがえのない存在であればあるほど、失いたくないと思う気持ちも。。希のクローンを作ろうとしたことを、誰もが批判するだろう。「命のコピー」など、倫理上許されるものではないと、私も頭では分かっている。でも私も考える。もし姉を生き返らせることができるのなら。。会いたい。語り合いたい。思い切り甘えたい。少しの間でもいいから。そんな想像が、どんどん大きくなっていった。

「命というのは、生まれるべくして生まれてくるもの」——この言葉はとても重い。私の姉のように、この世に生を受けることなく消えてしまふ命もある。人の命が神さまからの授かりものだとするならば、私の姉の場合、どう考えたらいいのだろう。よく分からないが、それにも何らかの意味があるのだろうか。

私は今まで、たくさんの習い事をしてきた。その全てを全力で頑張ってきた。何一つ手を抜かなかった。結果もそれなりに出してきた。私の心のどこかに、「姉の分まで」という気持ちがあったからだ。何不自由なく、好きなことをさせてもらえる自分は、それが叶わなかった姉の分まで頑張らなければ……。そんな気負いのようなものが常にあった。時々、母も祖母も、「無理だったらやめてもいいんだよ。」と言う。その度に私は「絶対やめない」と言い返す。こんなやりとりを何度くり返したことだろう。途中で投げ出すのは、やはり、姉に申し訳ないという気持ちになるからだ。

中学生になった今、部活や勉強、行事などがあって、これまで通りにはいかなかった。そんな私を見兼ねたのか、母がこう言った。「二人分頑張ることないんだよ。自分の人生をのびのびと生きればいいんだよ」と。二人分頑張る必要はない。母のこの言葉にハツとした。私は決して無理をしているつもりはなかった。自分なりに頑張ることに喜びを見出していただけだから。でも、母の言葉にどこかほっとしている自分がいた。「姉の分まで」と言って意地になっている私を見たら、姉だつてきっと喜ぶはずがないだろう。

おばあちゃん子の私は、幼い頃から毎朝、祖母の隣に座って、お仏壇に手を合わせる。そこには先祖代々の位牌が並び、一段下に小さな位牌がある。これが姉。「きょうも一日、家族みんなが元気に過ごせますように。」——毎朝同じことを祈る。家族みんなが元気で健康であれば、それ

だけで有難いと、祖母は口癖のように言う。確かにそうかもしれない。私がこれまで、大した病気もせず、「元氣自慢」で生きてこられたのは、姉から、「生きること」そのものを託されたからではないだろうか。それも、誰かのためではなく、自分のための人生を自分らしく生きていきなさいと。

希が航にとって唯一無二の存在であるように、私自身も、間違いなく唯一無二の存在。私は私として、生まれるべくして生まれてきた！今、私は心からそう思える。

対象図書名 クロノドック

## 中学生の部・最優秀賞(中二)

### 強く生きる

倉本 彩鶴

私はこの本を読み進めていくうちに、脳裏に一人の女の子が浮かんできました。何年たっても、私の心の片すみに、彼女のことを気にかかっているのです。

小学校の頃、母親が白血病で入院中の同級生がいました。その子は授

業参観、運動会など全て、祖母に来てもらっていました。身だしなみや、文具、その他の持ち物が決して清潔とは言えず、クラスのほとんどの人が、その子とすれ違いざまに「菌がついた」と騒いでいました。この本の主人公カリプリと同じ様に本もよく読んでいました。そのうち彼女は、父親さえも家を出て行き、妹と祖母の三人暮らしになりました。誰もまだその時、彼女の家庭の事を何も知らずに、ただのクラスメイトとして付き合っていました。今考えると、学校ではいじめられ、家に帰っても寂しい暮らし、本を読むことでだけ、そんな苦境を忘れられ、ほっとしていたのではなかったでしょうか。

ある日、その子にパッと友達ができました。私はそれを知り、不思議に思ったので様子を見ていました。すると、やはりそれは本当の友達関係とは違う「からかい」の部分がありました。それでも、一緒に過ごしてくれる人がいるというだけで、彼女は楽しそうで、心から笑っているように思えました。この本の中で、カリプリを絶望から救ってくれるメイのような人が友達なら、彼女も本に逃げることはなかったのかもしれない。

でも、その子の母親は、小学校の卒業式の前日に亡くなりました。卒業式当日に、私を含めたクラス全員が、その子の家庭の事情を知りました。今まで、彼女をからかい悪口を言っていた人達も、うなだれていました。

彼女がずっと、誰にも文句を言わず、家庭の事情も話さず、耐え続け

てきた様子がカリプリと重なります。私は中学が別々になったので、その後の彼女のことは分かりません。でも、これからの彼女は、きっとカリプリのように強い心を持つことを必要とされるでしょう。

「強く生きる」ということを、カリプリは父親に半ば強制されていた。人が一人で誰にも頼らず生きていくことは立派なことです。泣きたい時に涙をこらえ、自分の心の中でのみ解決するというのも立派なことです。

でも、その耐え続けてきた悲しみや寂しさは、どんどん自分の内側に積み重なって、ある日あふれてくる日がきつと来る、と私は思います。カリプリも、自分の小説がネットで酷評されたことで、感情が爆発し、おかしな言動をとりました。人格までもが壊れたような状態に陥りました。また、亡くなった母親の蔵書を捨てられた時、カリプリはとめどなく、父親に毒のある言葉を投げつけました。自分でも、父親を傷つけているのが分かっているのに、止められませんでした。まるで、毒薬のびんのふたを開けたように。

では、どうすれば積もり積もった感情を、爆発させずにいられるのでしょうか。それは、自分を自分だけで支えようとしなくていいのだと思います。その時その時に、強い心を持った人達に支えられると、自分の弱い所を自由に開放して、見せられる人間になると思います。

以前、何かで「人は唯一、笑える生き物、そして泣ける生き物なんだ。だから、泣いて笑って生きなさい。」という言葉聞いたことがあります。

本に逃げるのは楽です。わずらわしい現実の人間関係に翻弄されることなく、現実から逃げて、想像の中で生きて行くのは確かに楽です。本は、人を傷つけないし、自分は頭の中で、どんな幸せをも手に入れることができるのです。人との会話には守るべきルールがあり、昔から、雄弁より沈黙が勝るとも言われます。

しかし一方で、他の人と関わらずに生きていくことも、難しいことです。人と話をすることで刺激を受け、二倍のアイデアが浮かぶこともあります。学校でも、家庭でも、人と人が支え合って生きています。誰かに頼ったから、強い心を持っていないのではありません。友達に頼るから、強い心がなくなるのでもありません。

カリプリは母を亡くし、精神的に弱っている父親の世話をしています。たった二人きりの家庭でも、どうにか安らげる場所にしようと努力しています。彼女は強い心を自分のためだけでなく、父親のために使っているのです。「強い心」を人のために使うことこそ、意義のある生き方だと思います。どうかすれば、自分本位の毎日を過ごしている私にとって、目を覚ましてくれた一冊になったことは確かです。

対象図書名 レモンの図書館

## 中学生の部・最優秀賞(中三)

### 祖母が教えてくれた

箱島 実季

とても不思議な物語だった。ローズさんの真実に近づくにつれて、私もローズさんの生き方にどんどんひき込まれていった。異国からやって来たことだけでも心細いはずなのに夫に先立たれ、貧しくなってしまうのだから、悲しみに暮れるばかりで何も出来ず、どんどん不幸になっていく……。当時のたいいていの日本人は勝手にそう思い込んでいたようだ。今でこそ、日本の女性の活躍はめざましく、男性に頼って生きる女性はやや少ないが、逆境の中で、自分の人生を切り拓いて強く生きる女性となると、その当時は想像できなかったと思う。実際のローズさんは何が起きても自分の運命を受入れ、強くしなやかに生きてきた女性だった。

ローズさんの強さと私の祖母が重なった。その知らせはあまりに突然だった。この春、祖母が癌であることを知らされた。「ガン」と聞いただけで、私は目の前が真っ暗になった。今は二人に一人が癌になる時代。テレビでよく聞くフレーズだが、私にとっては他人事ではなかった。まさか自分の身内が癌になるなんて考えてもいなかった。今は医学も進んでいい治療法もあると聞くが、それでも命を落とす人は多い。母から

聞かされた時、私はあまりのショックで言葉が出なかった。病状はどうなんだろう。手術をするのかしないのか。これから、どうなるんだろう。ちゃんと元気になるのか。聞きたいことは山ほどあるはずなのに、何一つ言葉が出なかった。私が一番気になったのは、祖母自身が知っているかということだった。知っているのだとすれば、祖母の精神状態は大丈夫なのだろうか。しばらく時間がたつて、私は恐る恐る母に尋ねた。「おばあちゃんは知っているの？」母の話では、母も立ち合い、祖母は担当医から全て説明を受けたとのことだった。どんなにショックだっただろう。弱虫の私はとても気が重くなった。これから祖母にどう接したらいいのだろう。会った時にまずどう言葉をかけたらいのだろう。祖母の顔を見るのが辛い。その辛さから私は逃げようとばかりしていた。私はどうしようもない弱虫だから。

抗がん剤治療が始まり、その影響なのか、祖母は誰の目からも分かるように痩せていった。幼い頃の私をおんぶしてくれた背中が、今はとても小さく見える。元気な頃の祖母とは別人のようだ。「かわいそう・・」私の心の中は祖母に対して「かわいそう」一色になっていた。

でも、祖母は強かった。ローズさんのように今を強く生きようとしている。メソメソ泣くどころか、私が行くと必ず笑顔で迎えてくれる。私にダラダラしていると、以前のようにちゃんと叱ってくれる。体力をつけなければと、食事もしっかり取ろうとしている。明らかに祖母は病気と闘っていた。お見舞いに行く度に、健康な私の方が励まされる。

ローズさんも祖母も、強い。ローズさんの貧しさと祖母の病気という点では異なるが、どちらも世間からみれば「不幸」以外の何ものでもないように思う。実際、周りの人は皆、ローズさんを哀れに思った。私も癌になった祖母を「かわいそう」に思った。私は勝手に、祖母を不幸でかわいそうだと決めつけていたのだ。私は勝手に同情して、祖母を狭い世界に閉じ込めていた。でも、当の本人は自分を不幸だとは思っていない。そう思うひまがあつたら、病気を治す方にエネルギーを使った方がいいと考えているようだ。私にはそう見えるのだが、本当のところは分からない。もしかしたら、祖母は家族に心配をかけまいと、明るくふるまっているのかもしれない。一人になった時、不安におそわれ、その不安や恐怖と闘っているのかもしれない。私達の前では、そんな素ぶりは全く見せずに・・。だとしたら、祖母はやっぱり強いと思う。そんな強い祖母を私は心から尊敬する。

人はとかく自分の思い込みでその人を判断しがちだ。たとえば、「病気」イコール「不幸」という図式を勝手に作ってしまう。それは私だけではないと思う。この本の中でも、たくさんの人が自分の思い込みのローズさんを語っている。真実を横に置いておいて、自分の信じたローズさんを語っていた。人は自分の見たいようにしか見ないということだ。

ローズさんの真実を知って、私はこれからの自分の生き方のヒントをもらえたような気がする。弱虫の私は、今まで何でも悲観的に考えていた。でもそれでは、いつまでも弱虫のままだろう。ローズさんのように

そして祖母のように、逆境の中でも前向きに考えて生きていけたらと思  
っている。

対象図書名      ローズさん







第29回(令和元年度)全国読書作文コンクール

**優 秀 作 品 集**

令和元年10月 発行

発 行 公益社団法人 全国学習塾協会

〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-39-2

TEL 03-6915-2293 FAX 03-6915-2294

E-mail [info@jja.or.jp](mailto:info@jja.or.jp)

